

隠れた方言コンプレックス

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Kato, Kazuo メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00001080

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



隠れた方言コンプレックス

加藤和夫



●金沢方言とは

金沢方言は他の北陸方言と同様、音韻、文法、語彙など、いずれの面でも西部方言的特徴が多い。

ただ、金沢方言のアクセントは、アクセントの型が語の類別をこえて語音（末尾音節の子音が有声か無声か、母音が広母音か狭母音か）の影響を受ける点が特徴的であり、イントネーションでも、文節

末や文末でゆるる独特の間投イントネーションが聞かれる。文法面では、準体助詞のガ（ドコ イク ガヤ／どこ行くんだ）が金沢方言の大きな特徴の一つとなっており、城下町ゆえに発達したと思われる敬語表現にも特色がある。

石川県内の地方共通語である金沢方言の新しい動きをいくつか挙げておく。アクセントは若い世代

での共通語化が着実に進行している。一方、独特の間投イントネーションに乗ってうねるようにアン（ン）ネ（あのね）のように発音する現象が盛んである。文法関係では、くガヤ（くのだ）くくゲーくゲを経て変化した文末詞くゲンが大きな勢いを持っている。また、共通語形との干渉によるネオ方言的なものも生まれつつある。

一 はじめに

「金沢」という町は日本の地方都市の中でも有数の知名度を持った町と言えるだろう。幸いにして戦災をまぬがれ、古い城下町のたたずまいを随所に残す金沢は、日本三名園の一つに数えられる「兼六園」の存在とともに、「加賀百万石の城下町」「北陸の小京都」「古都金沢」といったキャッチフレーズで観光地としてのイメージが強い都市である。と同時に、北陸三県（富山・石川・福井）の行政・金融・民間企業等の中枢管理機能を担う都市でもある。

ところが、そうした都市としての知名度とは裏腹に、金沢のことは、金沢の方言の認知度は極めて低いと言わざるを得ない。

本稿では、今回共通の調査票で行なった全国14地点での方言意識に関する調査のうち、筆者の担当した金沢市における金沢方言に対するネイティブとノン・ネイティブの意識調査の結果を参考にしながら、金沢方言がどのように意識されているか、またその方言意識と共通語意識との関係について考察する。

なお、金沢方言の意識調査は一九九四年一月から九五年一月にかけて以下の条件に該当する人を対象に行なった。内訳はネイティブ（金沢市内およびその近郊出身、在住者）の三世代の男性、つまり高校生50名、活躍層（25〜40歳）50名、高年齢層（60歳以上）50名の計150名とノン・ネイティブ（石川県以外の出身者で金沢市およびその近郊在住者）の活躍層（25〜40歳）男性50名の合計200名である。

二 金沢の都市イメージと方言イメージ

今回の意識調査の項目の中に「金沢が好きか嫌いか」という質問があった。これについてはネイティブ150名のうち約80%（以下、表の一部を除いて%の小数点以下は四捨五入してある）の人たちが金沢を好きだと答えている。この数字は他の13地点と比較してもそれなりの高い数字を示している。

自分の住んでいる地域を好きだとする意識は、比較的定住意識が強いとされる日本人の一般的傾向とも言えるが、筆者が金沢で生活するようになってからの四年余りの間感じてきたことは、金沢に生まれ育った人の多くが金沢の百万石文化を誇りとし、金沢を住み良い町だと思っっているらしいと

いうことである。こうした意識には世代差はあまりないようで、百万石文化云々はともかくとしても、筆者の勤務先の大学に在学している地元出身の学生の話聞いていて「金沢はいいところだからずっとここで生活したい」といった気持ち漏らす者が意外なほど多いことに驚かされる。

同じ質問に対するノン・ネイティブ活躍層50名の回答はというと、これもまた74%の人が好きだと答えており、金沢という町は他県出身者にとっても住んでみると好きにさせられる要素がある不思議な魅力を秘めた町なのかもしれない。¹⁾

なお、今回の調査ではネイティブ、ノン・ネイティブともに、金沢（金沢に住んでいる人や土地柄など）について20の評価語を用いてそのイメージを尋ねているが、それぞれの評価語に対して「とても思う」「やや思う」という肯定的回答が多かった（あわせて50%を超える）。評価語を挙げると、ネイティブでは「田舎くさい」「素朴」「人情味がある」「閉鎖的」「のんびりしている」「純粋」、ノン・ネイティブでは「素朴」「人情味がある」「閉鎖的」「のんびりしている」となる。このうち「閉鎖的」を除けば、金沢の地域イメージは「素朴で人情味があつてのんびりした」地方都市としてのイメージであ

ることがわかる。しかも、金沢の場合は北陸の中心都市としての都会性も含んでいるため、ノン・ネイティブはネイティブ自身が思うほど「田舎くさい」とは感じていないことわかる。

ところが、こうした地域に対する好感度とは異なり、「金沢の方言が好きか」という質問に対しては、「好き」だとする人がネイティブの47%（「嫌い」8%、「どちらともいえない」45%）しかない。世代別には、高年層54%、活躍層46%、高校生40%という数字で、世代が下がるほど「好き」の回答率が減少している。ノン・ネイティブに至ってはさらに32%（「嫌い」18%、「どちらともいえない」50%）と低くなる。特にネイティブの47%という数字は、他の13地点のうち大垣、千葉を除いた11地点が50%を超えていることから考えても、かなり低い方に属することがわかる。また、ノン・ネイティブの32%という数字も、先に述べた「金沢が好き」という数字（74%）に比べると大きなギャップのあることがわかる。もっとも、ネイティブについては「嫌い」とする数字も低いので、「どちらともいえない」の数字をどう考えるかで解釈も異なつてこようが、少なくとも今回の調査結果から見るか

ざりにおいては、金沢の方言はネイティブの人たちにとって、積極的に「好き」だとは言にくい方言のようである。この「好き」とは言いにくいということが、いわゆる方言コンプレックスとでも言うべきものと関係があるのか簡単には結論できないが、このことは金沢方言の将来を考える上で見逃すことのできない重要な事実と思われる。

筆者は、このような金沢ネイティブの意識を分析しようとする場合、次の三点について注意しておくことが必要だと考えている。

一つ目は今も触れた「方言コンプレックス」の問題、二つ目は「金沢方言の全国的認知度」の問題、さらに三つ目は「金沢の都市イメージと方言イメージのずれ」の問題である。次節では今回の調査結果から、特に金沢方言に対するイメージを中心に取り上げ、さらに、それらとの関係で右の三点についても考えてみることにする。

三 金沢方言に対するイメージをめぐって

ここではまず、金沢方言のイメージに限定して考える前に、先行研究から金沢方言を含んだ北陸方言に対するイメージが

どのようなものであるのかを見ておくことにする。

井上史雄氏はかつて、全国七つの大学の学生50名を対象に、北海道・東北・関東・東京・中部・近畿・中国四国・九州の八方言に対して、各自の出身地の方言のイメージについてアンケート調査している。それによると、最終的に選ばれた16の評価語によって知的イメージと情的イメージそれぞれのプラス・マイナス度をみた場合、北陸方言に対する北陸地方出身者自身のイメージは、知的イメージにおいて最もプラス度の高い東京の対極（マイナス）に位置する東北にかなり近いマイナスイメージを示しており、若い世代においても北陸人はかなり自分たちの方言にコンプレックスを持つているらしいという結果が報告されている。そして、こうした北陸人の方言コンプレックスにも似た意識は、北陸地方以外に出てみてあらためて感じる北陸という地域、北陸の方言の全国的認知度の低さと深く関わっていると思われる。

この調査結果は、筆者自身の学生時代の方言意識を思い起こしても（むろん筆者自身の方言コンプレックスは方言研究を志して大きく変化したが）、またこれまでの北陸各地の方言調査の経験からも納得できるものであり、中でも、石川・富

山両県出身者に比べて、福井県嶺北地方の福井・鯖江・武生の三市を中心としたいわゆる無型アクセント地域出身者に方言コンプレックスが根強いように感じられる。⁽⁴⁾

では、先述のように、ネイティブ、ノン・ネイティブそれぞれに「好き」だとする回答が四割台、三割台と低い金沢方言は、具体的にどのようなイメージでとらえられているのだろうか。そのあたりを、今回の意識調査の結果からみることにする。

表1(80・81頁)は、先の地域イメージと同様、金沢方言に対するイメージを19の評価語(ノン・ネイティブには「使いやすい」を除いた18の評価語)を用いて尋ねた結果である。〈良いことば〉以下「使いやすい」までをプラスの評価語、「感情的」以下「早口」までをマイナスの評価語と考えることができると思われるが、それぞれの評価語ごとに、ネイティブ(高年層)、ネイティブ(活躍層)、ネイティブ(高校生)、ノン・ネイティブ(活躍層)の「そう思う」、「ややそう思う」、「そうは思わない」、「何とも思わない」の回答率を示してある。

表1中の評価語について、まずネイティブとノン・ネイティブの評価が一致しているものが何かを見てみよう。「そう思

う」「ややそう思う」という肯定的回答の回答率が比較的高いもので、ネイティブ各世代の平均とノン・ネイティブの数値の差が10%以内のものには、プラス評価語の〈素朴〉(ネイティブ、ノン・ネイティブとも62%)、〈味があふ〉(ネイティブ77%、ノン・ネイティブ80%)がある。一方、プラス評価語の〈きれいな〉、マイナス評価語の〈早口〉〈悪いことば〉〈荒っぽい〉では、ネイティブの平均とノン・ネイティブともに「そうは思わない」という否定的回答率が50%を超え、似た数値となっている。この結果から、ネイティブ、ノン・ネイティブに共通する金沢方言のイメージは〈素朴〉で〈味があふ〉〈があまりきれいな〉ではない。また〈早口〉〈悪いことば〉〈荒っぽい〉とは感じないということになるか。

では次に、ネイティブとノン・ネイティブで金沢方言に対するイメージにずれのあるものを見てみよう。ここでも、各評価語に対する肯定的回答のネイティブ各世代の平均値とノン・ネイティブの回答率で比較する。

まずマイナス評価語〈まのびしている〉については、ネイティブでは「そう思う」「ややそう思う」という肯定的回答率が45%であるのに、ノン・ネイティブでは64%とかなり増え

ている。金沢方言はネイティブの人たちが考えている以上にノン・ネイティブにへまのびしている印象をあたえているようだ。そのほか、プラス評価語の〈親しみやすい〉では、ネイティブの78%に対してノン・ネイティブ62%、へ表現が豊かではネイティブの55%に対してノン・ネイティブ34%と、いずれの評価語においてもノン・ネイティブはネイティブほど金沢方言をプラスイメージで捉えてはくれないことがわかる。また、一応マイナス評価語に含めた〈感情的〉ではネイティブの49%に対しノン・ネイティブは30%となり、ここでもかなりのずれが見られる。これらの結果からは、両者の金沢方言に対するイメージのずれが浮び上がってきて興味深い。

次に、表1の結果をネイティブ三世代間の世代差に注目して見てみよう。肯定的回答の率で比較すると、いくつかの評価語について明らかにネイティブ間に世代差が見られるものがある。

プラス評価語では、まず〈丁寧〉に大きな世代差が見える。高年層の70%に対して活躍層26%、高校生14%という結果である。このことは、伝統的金沢方言の特色の一つである敬語

表現（ミス、マサルなど）が急速に衰退し、活躍層以下の世代では敬語表現に共通語を使うようになったためのイメージの変化と解釈できる。金沢方言は〈丁寧〉な言葉というイメージはもはや過去のものとなりつつあるようだ。この結果は、マイナス評価語へきつい〈汚い〉における活躍層、高校生に比べての高年層の肯定的回答率の低さにも反映しているようだ。また、プラス評価語の〈素朴〉では高年層、活躍層が66%、74%であるのに高校生は46%と下がる。逆に、プラス評価語の〈使いやすい〉と一応マイナス評価語に含めた〈感情的〉については、高年層、活躍層に比べて高校生の肯定的回答率がかなり高くなっている。高校生にとつての〈感情的〉とは文字通りの意味だけではなく、感情を表現するには共通語より方言の方がしやすい、方言の方が自分の感情を素直に出せるといった意味が込められている結果ではないかと筆者は考えているが、こうした結果は、金沢ネイティブの間でも世代によつて方言イメージに確実な変化が生じつつあることを示している。そしてその変化とは、方言そのものに〈親しみやすい〉〈素朴〉〈味がある〉といった絶対的な価値付与をしている高年層的なスタイルから、共通語との相対的関係

マ イ ナ ス イ メ ー ジ	感情的	6	30	40	24
		8	42	42	18
		10	52	18	10
		8	22	44	26
	悪いことば	10	70	20	
		2	12	72	14
		10	15	68	6
		2	8	70	20
	汚い	8	18	46	28
		12	24	42	12
	20	15	68	4	
	8	22	58	12	
荒っぽい	4	6	60	8	
	16	38	52		
	16	20	58	2	
	14	24	54	8	
きつい	4	12	68	16	
	8	30	54	8	
	12	16	66	6	
	12	20	52	16	
聞き取りにくい	16	28	36	20	
	2	20	54	14	
	12	32	52	4	
	14	26	56	4	
やぼったい	4	20	50	24	
	8	36	40	16	
	14	18	34	34	
	6	30	50	16	
ねばっこい	12	30	34	28	
	14	40	42	14	
	18	20	50	12	
	6	30	44	20	
まのびしている	16	28	32	24	
	16	16	24	14	
	10	20	44	26	
	24	30	26	10	
早口	10	14	66	12	
	8	78	8		
	6	78	2		
	4	74	4		

表1 評価語による金沢方言イメージ（単位％）

回答 評価語		そう思う	ややそう思う	そうは思わない	何とも思わない	
		50				
ブラ ス イ メ ー ジ	良いことば	22	20	36	12	ネイティブ高年齢
		10	20	44	22	ネイティブ高年齢
		22	20	46	10	ネイティブ高校生
		12	24	44	20	ノン・ネイティブ
	きれい	20	16	50	12	
		6		80	12	
		10		66	14	
		16		62	20	
	丁寧	34	20	20	10	
		6	20	56	18	
		4	10	70	16	
		6	20	50	20	
おだやか	34	10	6	20		
	22	38	16	10		
	12	36	26	6		
	16	16	26	12		
表現豊か	28	20	30	12		
	12	40	36	12		
	20	36	30	16		
	10	24	38	28		
味がある	40	12	10	8		
	20	50	14	12		
	34	16	10	14		
	24	60	10	10		
素朴	34	22	18	16		
	22	30	12	14		
	18	28	36	18		
	12	30	22	16		
親しみやすい	34	18	6	12		
	24	40	16	14		
	28	40	14	4		
	20	40	28	10		
使いやすい	28	28	26	18		
	28	40	28	10		
		54	22	18	6	

の中で「使いやすい」へ感情的」といった役割付与をしている若年層的な姿への変化と解釈することができるのではないだろうか。

ところで、イメージの「ずれ」という点では、先にも述べた「金沢の都市イメージと方言イメージのずれ」ということについて若干言及しておく必要があるだろう。筆者は北陸地方、中でも金沢には、東北や九州を代表として全国のあちこちの観光地で見られる方言土産、方言グッズが極めて少ないことに注目して「金沢が観光の売り物になっているのは、伝統工芸をはじめ加賀百万石の雅な世界。一方、方言は庶民の世界の俗な言葉であり、この二つは矛盾する。このため、観光土産として金沢の言葉を売ろうという発想が生まれにくい」といった主旨のことを、金沢方言を取り上げた新聞連載の中で述べたことがある。観光都市としての知名度の高さと裏腹に、観光客には金沢の方言をイメージさせるような情報がほとんどない。男性観光客などから聞かれる「金沢は町のイメージと言葉に落差がある。金沢の風景や女性は美しいが、言葉はきれいとは言いがたい」といった発言は、「北陸の小京都」的な観光キャッチフレーズに名勝兼六園の風景を重ね合わせた美しい

町のイメージから観光客が勝手に作り上げた架空の方言のイメージと、訪れて実際に耳にした方言とのギャップから生じるものであろう。

四 金沢ネイティブの共通語意識

では次に、今回の意識調査の中から、金沢ネイティブの共通語意識に関するいくつかの項目について簡単に見ておくことにしよう。

金沢方言が今後どのように変容していくかについては、これまで見てきたような金沢方言そのものに対する意識とともに、共通語に対する意識が大きな鍵を握っていると言えよう。

なぜなら、地域社会の方言の有り様が、かつてのような方言と共通語の二者択一的な時代から、方言と共通語の共存の時代に変わってきているからである。例えばそこでは、共通語をどのように意識しているかが方言の変容の度合いや速度と大きな関わりを持つてくると予想される。共通語に対して強い対抗意識を持つていると言われる関西地方では、関西方言内部での変化（共通語との干渉によるネオ方言的なものの発生を含め）は様々に見られるものの、いわゆる共通語化に

はアクセントを始めとして今も強く抵抗し続けている。では、方言的には関西方言と共通する特徴を多く持つ金沢方言の場合はどうであろうか。

表2は「共通語が好きか嫌いか」という質問に対する結果である。高年層では予想以上に「好き」との回答が多い。活躍層や高校生ではその数値が二、三割に落ちることから、戦前までの学校教育の中で共通語が良いことばと教えられたこ

世代	好き	嫌い	どちらともいえない
高年層	62.0	0	38.0
活躍層	30.0	6.0	64.0
高校生	24.0	12.0	64.0
全体	38.7	6.0	55.3

表2 あなたは共通語が好きですか、嫌いですか。(単位%)

世代	ある	ない	わからない
高年層	78.0	18.0	4.0
活躍層	34.0	36.0	30.0
高校生	20.0	64.0	16.0
全体	44.0	39.3	16.7

表3 学校では共通語を話せるように教育する必要があると思いますか。(単位%)

場面	共通語	独特の金沢弁が出ないようにする	丁寧な金沢弁	家と同じ金沢弁	できるだけ話さない
地元・金沢弁を話す知人と	8.0	3.3	22.0	66.0	0.7
地元・共通語を話す未知の人と	46.7	18.7	21.3	12.0	1.3
東京の電車・金沢弁を話す知人と	21.5	16.1	24.8	33.6	4.0
東京・共通語を話す未知の人と	66.9	16.9	8.1	4.7	3.4

表4 次の場面ではどのような言葉で話しますか。(単位%)

とが影響しているのかもしれない。また、活躍層と高校生の場合も「嫌い」との回答は少なく、今回の京都市での調査結果と比べても、金沢ネイティブの場合は関西地方の人たちほどには共通語を嫌っていないことがわかる。

次に表3は「学校では共通語を話せるように教育する必要があると思うか」という質問に対する結果である。これを見ても高年層の「必要がある」との答えの

多さが目立つ。いわゆるテレビ世代でテレビ等を通じて自然に共通語を身につけることができた活躍層以下の世代と、そうではなかった高年齢との意識の違いと言えるだろう。⁽⁵⁾

また、表4（前頁）は場面による方言と共通語の使い分け意識を尋ねた結果である。ここでは三世代全体の数値のみ示したが、この結果からは金沢ネイティブの人達の、場面により相手により方言と共通語を使い分けようとする意識がよく現れている。現代は方言と共通語の使い分けの時代だとよく言われるが、表4は金沢ネイティブもまたそうした流れの中に身を置いていることを物語っていると同時に、今後の金沢方言の方向をも暗示していると思われる。

五 おわりに

以上、今回の金沢市におけるネイティブ（三世代）、ノン・ネイティブの方言と共通語をめぐる意識調査の結果を中心に、金沢の都市イメージと方言イメージ、ネイティブとノン・ネイティブの金沢方言イメージ、金沢ネイティブの共通語意識、の三つの観点から考察してきた。金沢市における方言意識・共通語意識をめぐる性差については今後の課題として残

されたが、一般に男性に比べ共通語化が早いとされる女性の言語使用には、方言と共通語それぞれに対する意識が大きく関わっていると予想されることから、是非明らかにしてみたいところである。ただ、男性のみの結果からではあるが、本稿によつてネイティブ、ノン・ネイティブのそれぞれが金沢方言をどのように意識しているか、またネイティブが共通語をどのように意識しているかについての現状は概略明らかにし得たと考えている。

北陸方言はその方言区画上の領域の狭さと関西方言との近似性から、いわゆる北陸方言の特徴はこれだというふうには外向かってアピールできるものが少ない。また、同じ北陸方言でも富山、石川両方言が比較的似た特徴を持つのに対して福井県嶺北地方の方言はやや一線を画して、北陸方言全体に共通する特徴（しかも関西方言とも異なる）が多くない。そうした背景の中で、北陸方言話者は自分自身の方言に対するアイデンティティを確立しにくい状況にあるようである。今回の意識調査の結果から金沢ネイティブに見え隠れする、金沢方言への好感度の低さや共通語に対する好感度の高さは、そうした北陸方言話者の「隠れたコンプレックス」とも

いえる意識の現れのように感じられるのである。

ちなみに、今回の意識調査の最後の方に「自分の子どもや孫にはどんな言葉を使ってほしいと考えるか」「金沢弁を後世に残しておきたいと思うか」という質問があったが、ネイティブ150人の答えは、前者については55%が「場合によって共通語と金沢弁で使い分ける」、37%が「どちらでもよい」、後者については53%が「残しておきたい」、38%が「どちらでもよい」という結果であった。

【注】

(1) 岡田正則(一九七三)「金沢市における開発と法的規制」(『金沢大学教育学部紀要人文科学・社会科学編』第41号)によると、一九七三年に金沢を含めた全国14都市でお互いの各都市の評価を問うたある調査では、金沢市のアメニティ(＝快適な環境)評価は総合評価で札幌市に次ぐ高い評価を得ている。伝統文化に親しむ地域性、中心部にも十分確保された自然環境、北陸の中核都市としての機能、歴史的な町並みや景観などが高い評価を受けている理由のようである。

(2) 自分たちの方言が好きかという質問に対するネイティブの「好き」だとする回答(三世代平均)は、松本の85%を筆頭に那覇(83%)、弘前と博多(75%)と続く。全国14地点のうち金沢は大垣(29%)、千葉(37%)に次いで下から三番目という結果であった。また、世代的にみると、金沢の場合と同じように多くの地点で高年齢層から活躍層、高校生と世代が下がるにつれて自分たちの方言を「好き」とする回答が減少している傾向にある。

(3) 井上史雄(一九七三)「方言イメージの評価語」(『東京外国語大学論集』

30号。井上史雄(一九七三)「方言のイメージ」(『言語生活』三三三)。

(4) 福井県嶺北地方の無型アクセント地域出身者の場合、自分が無型アクセントであることを自覚している人は少ない。その結果、たとえ意識的に語彙や語法を共通語的に言い換えたとしても、どうしても無型アクセントの平板な話調は残したままとなりがちである。他方言の話者には、その独特の平板な話調こそが奇異に映ることであるが、当の無型アクセント地域出身者には、なぜ相手も自分のことばを奇異に感じるのか理由が理解できないのである。その結果、いわずに方言コンプレックスを感じている人が多いし、また、たとえ理由がなかったとしても語彙や語法と違ってアクセントまで切り換えることは無型アクセント話者にとってはそう容易ではなく(テレビアクセントなどの影響で若い世代には例外的な話者も増えつつあるようだが)、そこでまたコンプレックスを感じる人も多いと予想される。

(5) 筆者が一九九四年の一月から二月まで計一四五回の新聞連載に協力した「頑張りまっし金沢ことば」(北國新聞)は、少々の手直しをして北國新聞社編集局編(一九七三)「頑張りまっし金沢ことば」(北國新聞社)として刊行された。金沢方言に対する意識の問題をめぐっては、その中でも言及している部分(本文引用部分は二頁、三頁より)があるのであわせて参照されたい。

(6) 表3に現われている高校生の結果は、別の見方をすれば、まだ方言中心の生活をしていて共通語の必要性をそれほど強く感じていないことも影響していると思われる。なお、高年齢層の八割近くが共通語教育が必要と答えているが、「共通語の手本は何か」との問いにはどの世代も六、七割がテレビと書物・新聞・教科書を挙げており、「教師の言葉」が手本との回答は高年齢層で12%、活躍層で4%、高校生では2%足らずという結果であった。

(かとうかずお／国語学)